



岩手県

★花巻市

岩手県のほぼ中央に位置する花巻市は、西に奥羽山脈、東に北上高地の山並みをのぞむ平野にある。
この花巻で、岩手を代表する銘柄豚として知られるのが、高源精麦株式会社の「白金豚」だ。
国内に数多ある銘柄豚の中でも、早くから高級豚肉ブランドのポジションを確立した「白金豚」の経営戦略と美味しさの秘密を探ってみよう。



誰もやらない
だからやる。



創業者の源太郎氏と、精麦事業を始めた2代目の護夫氏。

好きにやってみろ！

高源精麦の歴史は古く、創業は1910年（明治43年）。誠さんの曾祖父が花巻市の上町で米穀を扱う商いを始め、その跡を継いだ子どもたちが、農機具販売や精麦業へと事業を広げた。

社名にある「精麦」とは大麦を食べられるよう精製すること。精麦事業は、今は亡き祖父の護夫さんが30年代に始めた事業だが、大麦の需要低下に伴い、1962年には配合飼料の販売、64年には養豚業、70年代前半には精肉業と時代の変化に対応し事業の多角

化を図ってきた。

誠さんは、三人兄弟の長男。幼い頃から跡を継ぐことを心に決め、就職した日清製粉も1年で辞めて早々にUターン。経営に参画したのは1997年、23歳の頃だった。当時、高源精麦の養豚業はまさに転換期。父である靖

「美味しい豚肉をつくりたい」。その一心で父たちが開発した白金豚は、肉質が柔らかく、脂身が美味しい、全く新しい豚肉だった。ブランドボークの先駆けだったが、当初取引先のスーパーのバイヤーには連日クレームや難癖をつけられ、全く相手にされなかったという。

難癖をつけるバイヤーたち

「美味しい豚肉をつくりたい」。その一心で父たちが開発した白金豚は、肉質が柔らかく、脂身が美味しい、全く新しい豚肉だった。ブランドボークの先駆けだったが、当初取引先のスーパーのバイヤーには連日クレームや難癖をつけられ、全く相手にされなかったという。



花巻市中心部にある本社にて。高橋誠さんと高源精麦の皆さん。



宮沢賢治の水彩画が飾られた高源精麦本社。



奥羽山脈の麓にある第一牧場。

花巻市出身の童話作家・宮沢賢治の作品の中に「フランドン農学校の豚」という短編がある。これは生前の未発表作品のため、冒頭が欠損しているが、農学校で飼育する豚を食べるために処置するまでの過程を、人間の業と重ねて悲しく描写する物語だ。

その中で賢治は、穀物や食品残さから肉という食材を作り出す養豚業を、科学の実験に例え、「生きた一つの触媒だ。白金と同じことなのだ」と表現した。豚は、触媒の白金であり、養豚は壮大な実験であると。農学校の教師でもあった賢治が、どんな意図を持って、この作品を書いたのかはわからない。だが、高源精麦はこの短編からヒントを得て、「白金豚」という名前をつけ、賢治の親族に了解を得た。豚という生命を扱う仕事に対する戒めと、どこにも負けない美味しい豚を育てることで生命を全うさせたいという覚悟を込めて。

4代目社長の高橋誠さん（48）は断言する。「経済的に効率が悪くても、食べて美味しい豚を育てることが何より大事。そこは絶対に揺るがない。」